

カギノテクラゲの毒性・分布生態の解明と分類・生活史の再検討

海洋生産部・海区水産業研究部

研究の背景・目的

1. 平成 13 年 5 月から 6 月に荒崎周辺の潜水漁業者の間で、カギノテクラゲに刺されたと考えられる呼吸困難などの全身症状を伴う事故が相次いだ。
2. 北日本産のキタカギノテクラゲは強い毒性が知られているが、本州南岸のカギノテクラゲの毒性は知られていない。両者はかつて別種とされるなど分類上の混乱がある。
3. カギノテクラゲ類の毒性を確認し、原因物質とその強さを明らかにすること、カギノテクラゲの野外での分布と消長を調査し、警戒すべき時期や場所を特定すること、形態的特徴の比較等から分類を再検討するとともに、生活史を解明し、増殖機構の解明に資すること、を目的とする。

主な研究成果

1. カギノテクラゲの刺胞抽出物から神経細胞に特異的に作用する画分が見出された。
2. 2002 年の荒崎のカジメ場では、カギノテクラゲは 2 月から出現し、4 月下旬から 5 月中旬に最も多く、6 月に減少し、7 月以降消滅した。
3. カギノテクラゲは波当たりの穏やかなカジメ場に多く、ガラモ場には比較的少なく、アマモ場ではほとんど出現しなかった。
4. 荒崎のカギノテクラゲの直径は 20 mm を越えることはなかった。傘は扁平だったが、ホルマリン固定すると傘が高くなるように変形した。成長した個体の平衡器の数は触手の数とほぼ同じだった。
5. カギノテクラゲの成長は水温 10℃ で顕著に遅れた。2002 年にカギノテクラゲの発生盛期が早い時期に終息したのは、4 月の高水温によると考えられた。2001 年にカギノテクラゲの発生が遅かったのは、春季の水温が低かったことによると推察された。

波及効果

1. カギノテクラゲの毒性を世間に広く知らせる必要がある。
2. カギノテクラゲの被害と水温の関係が見えてきた。

